

ホスピス財団15周年記念講演会

“あなたは、どのような最期を望みますか”



7月2日(土)16時から、大阪新阪急ホテルにて「ホスピス財団15周年記念講演会」が開催されました。

オープニングでは音楽ゲストのスタン・オムステッドさんによる、リズムカルな曲や哀愁の漂う曲を交えてのフラメンコギター演奏を楽しむことができました。

記念講演では、志真泰夫先生が「ホスピス・緩和ケアになにができるか…しっかり生きてありのままに逝くために」と

題されてわが国のホスピス・緩和ケアの発展過程、現状と課題、そしてこれからの展望について講演されました。

後半の鼎談では、柏木先生、志真先生、恒藤先生により「これまでのホスピス・緩和ケアのあゆみ、そして私たちは何をめざすか」と題して、ホスピス・緩和ケアの世界が抱えている課題などについて、活発な意見交換がなされました。

参加者：200名

記念講演の要約

講師：志真泰夫氏

(日本ホスピス緩和ケア協会理事長)

わが国のホスピス・緩和ケアは、病院の入院病棟として1981年に聖隷ホスピスがスタートし、その後、1990年から医療保険の診療報酬に組み込まれて、それを財政的な基盤として発展してきました。そして、2007年から、がん対策基本法の施行を受けて、緩和ケアはがん対策推進基本計画の重要課題として位置づけられ、がん医療の不可欠な要素として統合されつつあります。

これからの重要な課題としては、緩和ケアのレベルを「基本的な緩和ケア」と「専門的な緩和ケア」に分けて、それぞれの役割と位置づけを明らかにしていくことです。

さらに、「われわれは何処に向かっているのか」これからのことを考えたい。緩和ケアと高齢者医療の統合、すなわちエンドオブライフ・ケアは、人生の晩年を生きる高齢者に対する積極的で共感的なアプローチとして、高齢者のニーズに合った幅の広いケアを提供することを可能にします。さらに、地域医療と緩和ケアの統合により地域包括ケアシステムを基盤とした地域緩和ケアネットワークが全国各地に作られるだろう



と思います。

そして、最後に両親を自宅で看取った経験から次のように締め括られました。

「私は父母を看取った体験から自分の緩和ケアの知識など大したものではない。知識は体験を超えることはできない。しかし、知識は体験を通じて試される。知識は経験という篩にかけられてやがて私たちの知恵となる。そして、たとえ辛い体験であってもそこから逃げずに積み重ねてゆけば、智慧を手に入れることができるかもしれない。誰にでも起きる人生の辛く苦しい体験と経験は、逃げずに味わうことが大切なのだと思う。」

2016 年度 ホスピス・緩和ケアボランティア研修会

「あらためて知りたい ホスピスボランティアのこと」

本年度は、7月21日に茨城県霞ヶ浦で開催されました。

当日の講演内容は「開催報告書」としてまとめられ、ホスピス財団ホームページでも公開予定です。



- 日 時：2016年7月21日（木）11:00～16:00
- 会 場：霞ヶ浦医療センター 地域医療研修センター講堂
- テーマ：あらためて知りたい ホスピスボランティアのこと
- 講 師：高宮有介氏（昭和大学医学部医学教育推進室）
田村里子氏（一般社団法人 WITH 医療福祉実践研究所）
- 参加者：57名

ホスピス・緩和ケアボランティア研修会 に参加して

日本病院ボランティア協会 理事 矢内 愛子



日頃は、外来・一般病棟でのボランティアをしている自分にとって、ホスピス・緩和ケアは特殊な場所と捉えていました。そんな私が、今回初めてこの研修会に参加してその思いは一扫されました。

医師の立場からホスピスの本質を語ってくださった講師の先生は、患者さんを一人の人間として見、その歩んでこられた人生を大切にすることがいかに重要かを言葉や視点を変えて話してくださいました。そして、「ホスピスとは死ぬための場所ではなく、より良く生きるための場所なのです」と語られた言葉が、強く印象に残りました。

このことは、ホスピス限定のことではなく、すべての診療科がすべての患者さんに対して大切にすべきこととしました。ボランティアも、目の前におられる患者さんを大事に思い、傍にいたることをさせていただく気持ちを忘れてはいけないと思いました。

医療ソーシャルワーカーの立場から語ってくださった講師からは、ホスピスにおいてはチームアプローチが重要であり、ボランティアもボランティアという専門性を活かしたかわりが大切であり、病院ボランティアの専門性、つまり非日常空間の病院に日常の感覚を取り戻す



きっかけを起こす存在であるということを再認識させられました。

「共に紡ぐ 優しい時間」という副題を、ワークを通して傾聴を実感する時が持たれました。参加者の皆さんがされている様子を外側から見ていて、課題が与えられても、ついついの自分で聞いてしまう姿が多く見られました。表情を出さずに相手の話を聞く＝表情の変わらない相手に話をする、は双方ともに苦痛のようでした。話していても聞かれていないなら話すのは止めようかと思われたようです。この体験を通して、話す患者さんに対してどのような自分で聞くことがより良いのか、が具体的に示されたと思いました。

参加されたボランティアの方々にはもちろんですが、病院職員や全く別の立場の方々にも、ホスピス・緩和ケアボランティアがどのような存在で、どんなに重要であるかが伝わった研修会であったと思います。これからも、様々な立場の方が参加される研修会が開かれます事を望みつつ、この会に参加できたことを本当に感謝いたします。

お知らせコーナー

Hutchinson 教授による『新たな全人的ケア』出版記念講演会

大阪会場 2016年11月26日(土) 13時～17時
千里ライフサイエンスセンター
東京会場 2016年11月27日(日) 13時～17時
大手町ファーストスクエアカンファレンス
講師 Tom A .Hutchinson 教授
参加費 無料・・・詳細はホームページをご覧ください。



第8回 グリーフ&ビリーフメントカンファレンス

■日時：2017年2月4日(土) 10時～16時
■会場：龍谷大学大阪梅田キャンパス
・・・詳細は近日中にホームページへ掲載予定

ホスピス財団の
新しいパンフレットが出来ました。

設立15周年を機に、ホスピス財団の新しいパンフレットを制作いたしました。ご利用いただけましたら幸いです。・・・ホームページでも閲覧できます。



メールマガジン“今月のお便り”配信中

毎月、タイムリーな話題や財団事業の案内等をお知らせしています。是非、“今月のお便り”をお読みください。ホームページより簡単に申込みが出来ます。また、バックナンバーも閲覧可能です。



新刊・近刊紹介

日本で
老いて死ぬ
ということ

朝日新聞 迫る 2025 ショック取材班
朝日新聞出版 1400円+税

2025年問題とは、いわゆる団塊の世代が死を迎える多死時代の象徴的な言葉となっているが、病院で死ねない時代が来るという、この深刻な問題に対する意識には、随分温度差があるようである。さらに 2030年には約47万人が「死に場所難民」になる可能性があるとのことである。

本書は、2013年から2年半にわたり、朝日新聞神奈川版に連載された記事を加筆・修正し再構成されたものである。神奈川での多くの取材の積み重ねは、この問題の大切さ、深刻さを読むものを感じさせずにはいられない。現実介護問題で苦しんでいる人々への取材は、決して他人事ではないと思わされるが、同時にその現場に関わっておられる家族や、それを支えている医療従事者、介護関係の方々の努力には本当に頭が下がる思いである。

2025年問題へ私たちが関心を持ち、考えていくことが初めの一歩であることを教えられる好著である。

こんにちは
ホスピス

松江市立病院 緩和ケア病棟

緩和ケアセンター長 安部 睦美

当院の緩和ケア病棟は 2005年8月に院内病棟型、22床で開設しました。晴れた日には「伯耆富士」とも呼ばれる大山を望むことができ、また「宍道湖の夕日」も病棟で過ごすみんなを癒してくれる景色です。昨年開設10周年を迎え、また気持ちを新たに患者さん、ご家族と向き合う日々を送っています。



宍道湖の夕日

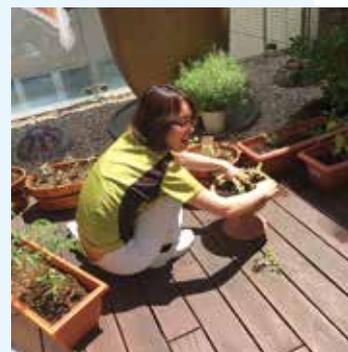
当病棟の特徴は音楽療法士が常勤でいることです。午後からラウンジでピアノ演奏があり、患者さんはピアノに耳を傾けておられます。先日の出来事、オカリナとピアノのコラボレーション。ボランティアの方がオカリナを演奏してくださったのですが、難聴でなかなか音楽での気分転換ができなかったAさん。オカリナの音はAさ

んの耳に届いたのです。その日を境にAさんの素敵な笑顔は多くなり、Aさんはオカリナの演奏があるときはラウンジで楽しく過ごされていました。日々の日常の中で音楽が流れていることは、患者さんの心地よさにつながり、たとえ短時間ではあってもつらさを忘れることのできるひと時になっています。

また開設11年目で「園芸部」ができました。ピーマン、ミニトマト、季節のお花……なかなか悪戦苦闘していますが、患者さんと一緒に「咲いたね、トマト、美味しかったね」と会話がはずんでいます。ふと「病」を忘れる時間、外の風を取り入れることにもみんなで取り組んでいる緩和ケア病棟です。

最後に緩和ケア病棟での療養を素敵な短歌で表してくれた患者さんの言葉を紹介します。

「緩和ケア 痛みをとってくださって
今日も私が生きていられる」



園芸部活動中

ホスピス財団 2016年度 事業進捗状況報告 (2016年4月～2017年3月)

1. 遺族によるホスピス・緩和ケアの質の評価に関する調査研究事業（第4次調査・1年目）… 進行中
2. 『ホスピス・緩和ケア白書 2017』（研究論文集+データブック）作成・刊行事業 … 進行中
3. 非がん疾患の終末期医療の実態に関する調査（3年目）… 進行中
4. わが国における小児患者に対する緩和ケアチームの介入についての実態調査 … 進行中
5. 認定・専門看護師による診断・治療開始時期のがん患者と家族へのオリエンテーション・プログラム… 進行中
6. ホスピス・緩和ケアボランティア研修セミナー開催事業
実施日：2016年7月21日（木）
場所：霞ヶ浦医療センター 参加者：57名
7. 第9回 Whole Person Care ワークショップ
実施日：2016年8月27日（土）
場所：千里ライフサイエンスセンター（豊中市）
参加者：20名
8. グリーフケア研修セミナー開催事業
実施予定日：2017年2月4日（土）
場所：龍谷大学大阪梅田キャンパス
9. 高齢者介護施設等の看取り教育研修 … 進行中
10. Hutchinson 教授による出版記念講演会
実施予定日：大阪 2016年11月26日（土）
東京 2016年11月27日（日）
11. ホスピス・緩和ケアフォーラム開催事業
実施予定日：2016年10月1日（土）
場所：各務原市文化ホール
12. ホスピス財団 15周年記念講演会
実施日：2016年7月2日（土）
場所：新阪急ホテル 紫の間 参加者：200名
13. 『これからのとき』『旅立ちのとき』冊子増刷
14. 一般広報活動事業
15. ともいき京都1周年記念イベント
実施日：2016年7月9日（土）
場所：河原町カトリック教会 参加者：234名
16. International Congress on Palliative Care 関連事業
17. Ellershaw 教授による講演会&シンポジウム
実施予定日：2016年10月7日（金）
会場：札幌コンベンションセンター 中ホール
18. アジア太平洋ホスピスネットワーク（APHN）関連事業
19. 日本・韓国・台湾 第2期共同研究事業(2年目)… 進行中

(公財) 日本ホスピス・緩和ケア研究振興財団 2015年度(第16期) 決算の概要

2015年4月1日から2016年3月31日まで (単位：千円)

科 目	2015年度決算
【経常収益】	
①基本財産運用益	4,173
②受取寄付金	30,808
(内訳) 賛助会費収入	25,325
一般寄付金収入	483
指定寄付金収入	5,000
③雑収益等	1,822
経常収益計 (A)	36,803
【経常費用】	
①事業運営費	35,664
(内訳) ホスピス・緩和ケアに関する調査・研究事業	13,828
ホスピス・緩和ケア従事者に関する教育事業	8,246
ホスピス・緩和ケアに関する広報事業	10,059
ホスピス・緩和ケアに関する国際交流事業	3,531
②一般管理費	5,744
経常費用計 (B)	41,408
当期経常増減額 (A-B)	▲4,605

寄付者一覧 (2016年3月～2016年8月 順不同、敬称略)

- (個人) 北脇 永典 渋江 理香、久家 郁子
藤森 貢 前田 隆康
大森 善行 田村 英典
- (団体) 株式会社 三孝社
NPO 法人 こころの救急箱
日本聖公会 大阪聖パウロ教会
公益社団法人 日本薬剤師会
株式会社 あゆみ印刷デザイン

新規賛助会員 (2016年3月～2016年8月 順不同、敬称略)

- (個人) 西里 卓次 山路 純正 山本 亮
谷 浩男 岩井 直路 山田 京子
上野 裕子 岡本 禎晃
- (団体) 医療法人 成和会 ほうせんか病院

寄付・賛助会員のお願い

私たちの活動は、全て、皆さまからのご寄付と賛助会員の方々の会費に拠っております。どうか私どもの活動の趣旨をご理解いただき、ご寄付・賛助会員のお申し込みを頂けるようお願いいたします。

また、「遺贈」による寄付もぜひご一考下さい。当財団は、三井住友信託銀行と「遺贈による寄付制度」について提携しております。公益法人への遺贈に拠る寄付財産は、原則として相続税の非課税財産となります。

上記ご寄付、賛助会員、遺贈に関するお問い合わせは **06-6375-7255** です。

編集後記

新幹線という言葉からの連想は、“速い、便利”だと誰しも思うが、遅くて、不便な新幹線もあることをご存知だろうか。日本一遅い新幹線として、鉄道ファンにはよく知られているのが、四国予土線で運行中の0型新幹線?である。宇和島-窪川間 77km を、最高速度 80km/h で、約2時間かける超スロー新幹線である。また1日に3往復というまことに不便な新幹線である。それでも、夏休みなどには全国から多くのファンが訪れるのは、田園風景と四万十川を臨みつつガタゴト走る姿が、なぜか心を和ませてくれるからではないかと思う。それは、慌ただしい、騒々しい日々を送っているものにとっては、ゆっくりリズムとスローライフの象徴的存在なのかも知れない。



慌ただしい人生を新幹線のように駆け抜けてきたが、せめて最期はスローライフでありたい、そして、そのようなホスピスライフであって欲しいと願うものである。

編集子